CSW68 報告書

青山学院大学 地球社会共生学部地球社会共生学科 4 年(CSW68参加時)

吉原佐保

この度は、大学女性協会の若手派遣に選出いただき、CSW68 にオブサーバーとして出席するという大変貴重な機会をいただけたことに心から感謝申し上げます。CSW68 では、世界中で女性の地位向上に向けて活躍されている第一線の方々の国際的な議論や視座の高いイベントに参加することで、ジェンダー平等という世界共通の目標へ向けての現在地と今後の課題、ユースとして成すべきことを学び得ることがきました。この報告書では、CSW68 に参加して感じたことや学んだこと、今後自分がジェンダー平等に向けて取り組みたいことを綴らせていただきます。

目次

1. CSW 68 に参加して学んだこと

2. CSW 68 に参加しての所感

3. 今後の取り組み

1. CSW 68 に参加して学んだこと

ジェンダー先進国ですら慢心していられない、女性の経済的自立までの長い道のり

3 月 12 日は北欧大臣評議会が主催するサイドイベント”A Gender- Equal Future for Financial Freedom”（直訳：経済的自由を実現する男女平等の未来）に参加した。このサイドイベントでは、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、スウェーデンの 5 カ国でジェンダー平等の推進を管轄する各国の大臣が集まり、女性の経済的自立において依然として課題が残る分野について意見交流を行った。男女平等の促進に 40 年以上注力してきた北欧諸国でも業界・業種別で男女間の賃金格差が根強く残っていたり、ケアの領域に当たる介護労働の不均等配分など、女性の経済的自立には程遠い現状が各国の大

臣の口から述べられた。

私がこのサイドイベントで特に学んだことは、ジェンダー先進国とは思えない程の大臣達の自国の現状に対する謙虚な姿勢とジェンダー平等に向き合う志の高さである。北欧諸国はジェンダー平等に最も近い国々として他国をリードする存在でありながら、現状に慢心してはならないと力強く答えていた。国の現状を数字を用いて多面的に評価できている点や、男女間の賃金格差などのまだまだ是正しきれていない課題を自ら取り上げて具体で議論する姿勢には、日本も見習わなくてはと気が引き締まると共に大変エンパワーされた 90 分だった。

This is not a women's issue, it is a human right's issue.

3 月 21 日には UN Women と ILO と OECD で共同開催されたサイドイベント"The Gender Pay Gap : Addressing Gender Income Inequality. Applying The Principle of Equality Pay for Work of Equal Value in Times of Crisis and Rising Poverty"（直訳：男女間の賃金格差：男女別の収入不平等に対処します。危機や貧困の増大において、同一価値労働同一賃金の原則を適用する）に参加した。こちらの会議では、他サイドイベントでも注目されているトピックである「男女間の賃金格差」について議論されていたが、特に印象的だった点は二つある。

一つは、各国が経済におけるジェンダー不平等な現状を女性の問題として捉えるのでなく、人権・労働・社会の課題であると皆が共通認識を図り、女性特有の問題と敬遠されることに真っ向から反発していたことである。議論の中では、女性の経済的自立が遅れている原因に、男女間の賃金格差や特定の業界・業種における女性進出の遅さ、あるいは男性の参入の少なさ（例えばケア労働）などが挙げられていた。これまでの経験上、国内でこのような議論が挙げられた際には、いかに女性が経済的自由を獲得するのが難しいのかと女性特有の課題や特徴に着目する議論が多かった。しかし、このイベントでは「なぜ女性の経済的自立が難しいのか」ではなくて「女性の経済的自立が損なわれるのは人権問題であり社会が抱える大きな課題」と認識した上で「如何に当事者以外を巻き込んで経済的自立を獲得するか」が盛んに議論されていた。原因の追求よりも課題の解決を議論することに熱中するこの空間は、日本では味わえない独特の力強さと強引にでも前進しジェンダー平等を達成したいという一人一人の意志の強さを垣間見た。

もう一つは、そんな熱い議論を繰り広げても最終的な着地点が「ジェンダー課題への男性の積極的な参入」に落ち着いてしまうことである。他のサイドイベントでも同様の議論が行われ、「This is not a women's issue, it is a society, labor right, economy, and human right's issue」と演説する者に対して拍手喝采でエネルギッシュな時間を過ごしても、結局は特権を握る男性陣にジェンダー課題へ参画してもらわないと話が進まないという結論で会議が終わってしまう。如何に彼らに参画してもらうのかを議論することはなく、男女間の賃金格差は人権の問題であるという共通認識を図ることで議論が落ち着くことに惜しいという感情が芽生えるとともに、CSW というある意味で単発的なイベントでの議論の限界を思い知らされた。

2. CSW 68 に参加しての所感

CSW をパフォーマンスで終わらせてはいけない

3 月 14 日はユースダイアログという大事なイベントがあった。これは昨年から本会議と同じ公式の会議として登録されており、各国のユース代表が一同に集まりジェンダー平等に対する各々の思いや各国の現状をスピーチするイベントである。日本ユース代表の鈴木りゆかさんのスピーチは国内の具体的な事例を扱いながらも最終的には抽象度を高く持って「パフォーマンスで満足しては行けない」ことを訴えかけられていた。

私自身も CSW に参加するなかで、全てがパフォーマンスなのではないかと懐疑的になってしまう場面がいくつもあった。北欧諸国の志の高さに感激した一方で、彼ら彼女らは自国の状況を共有し、共通の課題認識を持っていることを確認したが、その認識した課題に互いにどのように向き合うのか、具体的にどのような解決策を提示していくのかは 90 分では惜しくも議論されず、ただただ多国間で現状を共有するのみであった。パラレルイベントでも、力強いチアアップな言葉と共に会場にいる皆がエンパワーされ、「共に戦おう、it is not women's issue. it is a human right issue！」と励まし合っていた。しかし、誰も戦うために必要な手段を明確に提示することはなく、他国の good practice を聞いて自国にこんな風に取り込んでいきたいという他者からの学びを示す人はいなかった。

NY の国連本部という選ばれた人しか入れない領域で行われるイベントの

数々に、いつの間にか私自身もパフォーマンスの世界に浸っていることに気付いても見て見ぬふりをしていたかもしれない。日本ユース代表の鈴木りゆかさんは、そんな形骸化した議論に初心を忘れてはいけないことを訴えかけた。

3. 今後の取り組み

大切なのは団結し、次に繋げていくこと

ユースダイアログで日本ユースを代表して鈴木りゆかさんに素晴らしいスピーチをしていただいた後、BPW の神原先生が宿泊先で日本の NGO 関係者とユースを対象にパーティーを開催してくださった。ここで初めてユース同士が対面で顔を合わせ、各々の感心分野について大人の方々と意見を交わしたり、これまでの政府代表ブリーフィングの軌跡を教えていただいたりと大変有意義な交流会が行われた。

そんな中で私たちユースは、先程まで傍聴していたユースダイアログで集めた声が CSW の合意結論に反映される仕組みが全くないことに嘆き、各国ユースの熱いスピーチが何も意味をなさないことに不満を漏らしていた。その際に、交流会にご出席されていた神谷先生から目から鱗な大変貴重なアドバイスをいただいたのでここで共有したい。

「ユースの声が反映されるシステムがないと嘆くだけではなく、ユースの皆さんには自分の足で立って自分の言葉で発言してほしい。」

「しかし、それを今すぐに実践するのは難しいだろう。だからこそ、ユースで団結してほしい。大切なのは団結し、そして次に繋ぐこと。」

「団結する手段がないなら自分たちで作り、声を反映させる仕組みがないなら自分たちで働きかける必要がある。」

神谷先生には、私たちユースに主体的な行動と次の代に学びと経験を引き継ぐ意思が必要であると教えてくださった。恥ずかしながらこれまでの自分は CSW の仕組みに文句を言うだけの受け身な姿勢を取っており、CSW 69 のユースのことまで考えた行動が出来ていなかったことにようやく気がつけた。

今後の取り組みとして、まずは CSW68 に参加した私たちユースが何を学び受け取り、次に繋げていきたいのかを発信する場を設けるために、各 NGO の

ユースが一堂に集まり報告する会を企画し運営する予定である。それぞれのユースは関心分野も参加したサイド・パラレルイベントもバラバラであるが、日本におけるジェンダー平等の実現という共通のゴールにむけて学び得たものを皆様方に共有した。また、「団結し、次に繋ぐ」大切さを神谷先生に教えていただき背中を押していただいたため、CSW 69 に参加したいユースに向けての情報共有や引き継ぎ事項の伝達も一年かけて行う予定である。

最後に、CSW 68 への参加という貴重な機会を提供し、サポートしてくださった大学女性協会の皆様方、現地でのサポートと新しい視点を共有くださった他 NGO の皆様方、学びと経験を次に繋げる大切さを教えてくださった神谷先生、その他の全ての方に感謝申し上げます。この 2 週間で学び得たものは今後の活動に必ず活かし、日本におけるジェンダー平等を実現させるために社会へ貢献して行きたいと思います。